

# ews Letter

ニュースレター

ニュースレター

2007 Vol.7

九州大学韓国研究センター

Research Center for Korean Studies

## CONTENTS

九州大学の国際戦略と韓国研究センター	2
世界韓国研究コンソーシアム	4
日米韓3大学次世代研究者国際ワークショップ	6
日韓国際ワークショップ	7
日韓国際シンポジウム	8
福岡－釜山フォーラム	9
福岡県民シンポジウム	10
韓国国際交流財団大学院生対象研究奨学金報告会	11
日韓海峡圏学生サミット	12
韓国理解講座	13
客員教授紹介	14
韓国研究センターの研究活動一覧	15
Information	16

# 九州大学の国際戦略と韓国研究センター



九州大学韓国研究センター長  
**稻葉 繼雄**

九州大学では、2002年4月1日に「国際交流推進機構」が整備され、「歴史的・地理的必然が導くアジア指向」と「世界的知の拠点形成」を基軸とした国際戦略を展開してまいりました。今日まで、既に五年の歳月が流れ、その間、我々韓国研究センターは、この戦略を次のように具現化してまいりました。

## 歴史的・地理的必然が導くアジア指向

名称からも明らかなように、韓国をフィールドとする九州大学韓国研究センターは、アジア指向を強く持った研究機関です。特に韓国の諸大学とは年間数次にわたる共同研究会を開き、互いに切磋琢磨しつつ強い紐帯を築いてまいりました。同時に、韓国への興味・理解を高めるため、大学内では「韓国理解講座」の開設を通じて、広く一般県民に対しては「県民セミナー」「県民シンポジウム」を通じて、韓国学・韓国文化を紹介しています。さらには、福岡・釜山の産官学のリーダーが一堂に会し、地域が牽引する新たな日韓関係の構築を目指す「福岡－釜山フォーラム」では、福岡側事務局を担当し、両地域の一層の発展に寄与しております。

このようにアジア指向を体現する研究機関として、韓国研究センターは着実に行動してきました。

## 世界的知の拠点形成

九州大学韓国研究センターのイニシアティブのもと、2005年2月20日に世界5カ国8大学（九州大学・オーストラリア国立大学・復旦大学・北京大学・高麗大学校・ソウル大学校・ハワイ大学・UCLA）の韓国研究センターを連結したグローバルネットワークである「環太平洋韓国研究コンソーシアム」が構築されました。翌2006年10月10日には、さらに4大学（ハーバード大学・UBC・延世大学校・ロンドン大学SOAS）が加わった「世界韓国研究コンソーシアム」へと発展しました。このような世界に類を見ない地域研究のグローバルネットワークの結節点として、九州大学韓国研究センターはその事務局を担っております。

同コンソーシアムでは、次世代研究者育成のための国際ワークショップをこれまで2次に渡り、九州大学にて開催してまいりました。さらに、同ワークショップの研究成果を公表する場として、国際ジャーナルの発行を行い、世界の硕学により査読・編集が行われております。また、同コンソーシアムのネットワークを利用した共同研究会も、年数次にわたり実施し、世界レベルでの研究交流を推進して参りました。

韓国研究センターは、まさに、世界的知の拠点として、世界の韓国学をリードする機関へと成長して参りました。

これらの実績は、言うまでもなく多くの方々に支えられながら、活動を行ってきた結果であり、多くの方々のお力添え無しには、達成することのできなかったものばかりです。

グローバル化時代における韓国研究センターの更なる活躍のためにも、今後とも、倍旧のご支援とご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

## 九州大学から世界へ、世界から九州大学へ グローバル化時代の韓国研究拠点



# 第2回韓国学国際ワークショップ： 韓国学の新しい潮流

期間：2006年8月1日(火)～6日(日)

会場：アクロス福岡・九州大学

主催：世界韓国研究コンソーシアム

主管：九州大学韓国研究センター

助成：韓国国際交流財団・九州大学P&P

2006年2月に結成された世界韓国研究コンソーシアムを中心に、公募による参加4校を加えた世界16大学より大学院生26名が福岡に終結。12大学の講師陣による世界基準の講義を受けた。さらに「政治」・「歴史」・「文学」・「近現代史」・「韓流」・「その他」の六分科会で自身の研究成果を全員が韓国語にて発表し、熱い質疑応答を繰り広げるなど、互いに研鑽を積んだ。

また同期間中、世界から集まった大学院生は、文字どおり寝食を共にすることで深い友情で結ばれた。このことは、次世代研究者の世界的ネットワーク構築に、同ワークショップが大きく寄与したことを意味するであろう。

そして、このワークショップの研究成果の一部は、世界韓国

研究コンソーシアムが主管する国際学術誌『Korean Studies for New Generation』vol.1に掲載されている。

## ～参加者の声～

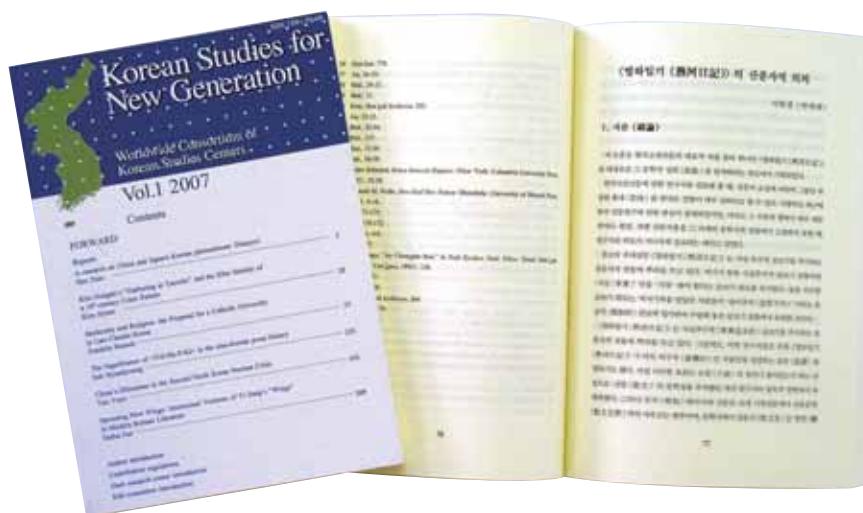
参加した大学院生や、様々な国からいらした先生方にお会いでき、お話をすることだけでも大変な勉強になり、自身の助けにもなった。また、ワークショップ全体の雰囲気が、学生主導で行われるオープンな雰囲気だったのでよかったです。

ワークショップではテーマにある「韓国学の潮流」を代表する諸先生方から講義を受けることができ、自分の研究の位置づけ、また未熟さや課題を確認することができた。自分が属した「その他」分科会には改善の余地があると思われるが、いずれにせよ、ここで出会えた友人と将来どこかで「韓国学」者として、同じように「韓国学」ワークショップの講義を担当しあえるような研究者になりたいと決意させてもらった有意義な時間であった。

# 『Korean studies for New Generation』創刊 次世代韓国学研究者の育成を目指して

世界韓国研究コンソーシアムが編集・発行する次世代韓国学研究者のための国際ジャーナルである『Korean studies for New Generation』が創刊された。昨年度九州大学で開催された第1回世界11大学韓国研究国際ワークショップにて

発表された研究の中から、優れた研究成果を中心に、6編の論文が収録されている。今後、世界の次世代韓国学研究者が、掲載を希望してやまない、国際的なジャーナルへと成長していくだろう。



## 発表者一覧

発表者	所属	題目
東絶	북경대	동북아시아 지역적 협력 - 한중일 3 개국 중심으로
연옥야	복단대	China's Diplomatic Dilemmas in North Korea Nuclear Crisis
양소영	UBC	Contemporary South Korean Intellectuals in Atate and Civil Society : the Role of Intellectuals in the Cheonggyecheon Restoration Project
타무라 よしひ로	규슈大	식품안전정책의 한일 비교 - 위협정보교환에 대한 대응을 중심으로
박혜진	ANU	파라과이 한글학교의 민족 교육과정과 한인 2세의 민족정체성을 살펴보며
타나카 ミスハル	규슈大	한국 초등학교의 특별활동에 관한 연구
권희영	서울대	전후 고아양자특별조치법의 시행과 해외입양 50년
루씨언 브라운	SOAS	사회-화용론적 대우법 접근 및 제 2 언어 대우법 습득 연구
김보광	고려대	한국중세 국제관계의 구조변동과 교류의 양상
올스턴 대인	ANU	reconsidering late Koryo Confucianism through the thought of Yangch' on Kwon Kun(陽村 權近 1352-1409)
보넷 아담	Tronto	大明遺民과 忠臣談論 - 通州康氏를 中心으로
김지연	UCLA	김홍도의 “단원도”-조선후기 화원의 자기 이미지 만들기
백민정	연세대	西學과 朱子學에 대한 丁若鏞의 대응논리-朝鮮後期 지식인의 주체적 시대인식
서현경	연세대	<熱河日記>의 散文史的 意義
최민구	Hawaii	혈의 누에 나타난 개화 담화/담론의 특성과 관계 양상
유명인	RUB	金台俊의 韓國文學 研究와 學界의 歷史認識 - <朝鮮小說史>連載本과 京城帝大 在學時節을 中心으로
권경미	Harvard	박완서의 엄마의 말뚝 1.2.3 을 중심으로 본 한국 근대 여성의 정체성과 그 형성
박시내	UBC	한국인의 정체성 담론과 恨
김도형	성균관대	가토 히로유키(加藤弘之)의 한국적 수용과 그 번역양상에 나타난 정치적 의미-人權新說과 強者の 權利競争論을 중심으로
최윤정	Harvard	Rationalized topography, beef eater, and the search for authenticity in Yi Kwangsu's Kumgangsan yugi
이윤정	SOAS	1920년대 우생학의 동향과 이광수의 민족개조론
고송희	서울대	Dyed Hair and Protest Marches : Changes in Women's Positions During the American Military Government Period
한효	산동대	중국과 일본의 한류 현상의 대해서
이경숙	고려대	한국 만화원작드라마의 기원과 전개
황현옥	복단대	중국 상해지역 한국학 연구 현황과 인재양성
김자혜	규슈大	일본 ‘소녀만화’ 수용-야자와 아이[]의 한국 독자를 중심으로



日米韓3大学次世代研究者国際ワークショップ

# 『植民地近代』研究の展望： 在朝日本人のオーラルヒストリー

日 時：2007年2月12日(月)

会 場：UCLA韓国学研究所

参加大学：九州大学、UCLA、高麗大学校

主 催：RCKS

助 成：高麗大学校民族文化研究院・UCLA韓国研究センター

## 《プログラム》

### 第1部 植民地朝鮮でのアイデンティティ

基調講演：石川亮太(佐賀大学経済学部助教授)

「『植民地近代』と在朝日本人研究」

山下達也(九州大学大学院人間環境学府博士課程)

田中光晴(九州大学大学院人間環境学府博士課程)

「植民地朝鮮における学校教育－初等学校の「内地人」教員を中心に」

Howard Kahm(UCLA Asian Languages and Cultures)

「Japanese Financial Institutions in Colonial Korea」

金素伶(高麗大学校大学院韓国史学科博士課程)

韓承勲(高麗大学校大学院韓国史学科博士課程)

「韓国内の日本強占期在朝日本人関連研究史および口述調査の現況」

### 第2部 植民地朝鮮での暮らし

山口華代(九州大学大学院比較社会文化学府博士課程)

崔相振(九州大学大学院比較社会文化学府博士課程)

「在朝日本人の植民地経験に対するオーラルヒストリー」

Paul Nam (UCLA Asian Languages and Cultures)

「A General Overview of Tenancy in Colonial Korea」

成淑璟(高麗大学校大学院韓国史学科博士課程)

金志炯(高麗大学校大学院韓国史学科博士課程)

「植民地時代の口述調査研究といくつかの問題」



### 第3部 総合討論

#### ～参加者の声～

今回の国際ワークショップでは日米韓3カ国の植民地研究あるいはオーラルヒストリ調査研究に従事する若い研究者が各国の研究動向や各自の研究成果を披瀝した。なかでも、オーラルヒストリ調査研究において、3カ国の発表者と参加者間にその方法論や価値、そして歴史資料として活用法などをめぐって活発な議論が展開された(各國の研究方法論の違いに若干驚いた)。特に今回、各國の研究者が方法論に関する問題意識を共有する試みは、今後の研究方法論の開発や研究協力体制の構築につながる初めの一歩になったと思う。



## 日韓国際ワークショップ2006

# 解放後と解放前：連続と非連続

日 時：2006年12月16日(土)  
 会 場：成均館大学校東アジア学術院6階第1ゼミナール室  
 共 催：九州大学韓国研究センター・成均館大学校東アジア学術院

### 《プログラム》

#### 第1部

基調講演 有馬学(九州大学教授)

#### 第2部 研究発表

文暎周(成均館大学校東アジア学術院)

「韓国歴史学界の在朝日本人史研究－その研究状況と展望－」

李圭洙(成均館大学校東アジア学術院)

「植民者の朝鮮記憶の虚像と実像－不二會を中心として－」

松本武祝(東京大学助教授)

「植民地朝鮮における農業学校卒業者の

進路分析－「学歴主義」と関連させて－」

新城道彦(九州大学大学院比較社会文化学府博士課程)

「王族の国葬にみる朝鮮統治の体裁－

三・一運動前後における体裁の連続・非連続－」



#### 第3部 研究調査中間報告

李美淑(成均館大学校東アジア学術院 硕士課程)

「雑誌『韓半島』を通してみた在朝日本人の朝鮮認識－論説を中心として」

柳石桓(成均館大学校東アジア学術院 硕士課程)

「韓国近代文学研究の新しい方法論の摸索と出版社研究」

木村健二(下関市立大学)

「在朝日本人史研究の発展方向」

石川捷治(九州大学)・申鎬(九州産業大学非常勤講師)

山田良介(久留米大学非常勤講師)

「朝鮮半島からの日本人引揚者オーラルヒストリー調査」



#### 第4部 総合討論

##### ～参加者の声～

これまでの日本統治期朝鮮の研究は、統治者〈日本〉と被統治者〈朝鮮〉という2項対立の構図が前提となって論じられてきた。日韓国際ワークショップ2006では、そうした〈日本〉と〈朝鮮〉という単純なカテゴリーを超えることを目的として開催され、活発な議論がなされた。その中でも、有馬教授の基調講演は重要な問題提起であった。映画『綴方教室』には東京下町の背景(エキストラ)として朝鮮人が登場しており、そこから〈日本〉の日常の中に〈朝鮮〉が自然に存在していたことが指摘された。現代の価値観によって引かれた境界線を超える重要性を改めて学ぶことができたのは、このワークショップ最大の収穫であった。



## 日韓国際シンポジウム2006

## 在日朝鮮人文学の世界

日 時：2006年6月17日

会 場：九州大学職員会館 セミナー室

主 催：九州大学韓国研究センター・全北大学校人文学研究所

主 管：在日同胞文学研究団

後 援：韓国学術振興財団・朝日新聞西部本社・科研費：植民地  
期朝鮮半島オーラルヒストリー調査研究プロジェクト

近年日韓両国で盛んになっている在日文学研究に対する、日韓の研究者が集った初めてのシンポジウムである。奇しくも本年（2006年）は『<在日>文学全集』が、刊行された年に当たり、今後一層の深化が期待されている。そうそうたるメンバーを揃えた今シンポジウムでは、川村湊氏の在日文学は終焉を迎えた、という刺激的な基調講演に始まり、熱い議論を呼び起した。

このシンポジウムの様子は、『架橋』2006冬号にも紹介されている。

## 《プログラム》

基調講演 川村湊（法政大学）

「在日文学の新しい展開」

## 第一主題 在日朝鮮人 詩人達の世界

佐川亜紀（詩人・評論家）

「在日詩人達の詩世界(1)－解放から1965年間まで」

高柳俊男（法政大学）

「在日文学と短歌—韓武夫を手がかりとして」

## 第二主題 日本名 朝鮮人作家の作品世界

黄奉模（全北大学校）

「金城一紀の文学世界」

金貞恵（釜山外国语大学校）

「立原正秋文学に表れた美意識の世界」

金煥基（東国大学校）

「鷺沢萌の文学論」

## 第三主題 その他

林浩治（評論家）

「在日朝鮮人文学と金泰生の風景」

高二三（新幹社社長・前『三千里』編集委員）

「季刊三千里の周辺の作家たち」

磯貝治良（評論家・小説家）

「&lt;在日&gt;文学の女性作家・詩人」



## 福岡－釜山フォーラム

# 福岡－釜山フォーラム設立総会

日 時:2006年9月9日

会 場:大韓民国釜山市海雲台区パラダイスホテル

福岡と釜山の民間リーダー22名が集い、福岡－釜山フォーラムを釜山にて設立総会を開催した。同フォーラムは、「交流から協力へ」をテーマとしてあらたな地域間協力の形を模索する集まりである。福岡－釜山フォーラム設立総会に引き続き、討論が行われ、釜山宣言2006が採択されるに至った。九州大学からは梶山千里総長がフォーラムメンバーの一員となっており、韓国研究センターは福岡側事務局の重責を担っている。

### 釜山宣言2006

福岡と釜山の両都市で活躍する財界・言論界・教育界・文化界・医療福祉界のリーダー22人が2006年9月9日、大韓民国釜山広域市において、「福岡－釜山フォーラム」を設立し、「『国境を越えた地域』協力の新しいビジョンの提示:交流から地域協力へ」というテーマで、第1次「福岡－釜山フォーラム」を開催した。

日韓両国を結ぶゲートウェイに位置する福岡と釜山の両都市は、未来志向で建設的な両国関係を構築する上で、それぞれの国で牽引車の役割を果たすべきであると合意し、以下の事項に対して認識を共有した。

- 1.福岡と釜山間の人的交流が毎年増加していることを歓迎する。この交流を今後量的にも質的にも拡大・深化させていくために、行政による更なる支援とインフラや法の整備が必要である。こうした積極的な支援を土台に今後両地域は交流から協力へ、協力から共同体への発展を模索しなければならない。福岡－釜山の協力体構想は東アジア共同体構想の良いモデルになるに違いない。
- 2.福岡市と釜山市が各々「世界都市 釜山」と「アジアの拠点都市 福岡」を標榜していることを高く評価し、こうしたビジョンを早期に実現していくために、それぞれの地域が有する潜在力を活用して、両都市間で具体的で相互補完的な政策の共有が必要である。
- 3.福岡と釜山は優れた人的資源を確保するために、良質の教育を持続的に供給しなければならない。そして、先端産業の創業と育成に必要な高水準の研究環境を構築し、来るべき地域協力の時代をリードする国際人を育成する必要がある。

こうした認識をもとに、第1次福岡－釜山フォーラムにおいて報告者の報告と自由討論を通じて提起された事案に対して、より具体的な計画案を検討するために、フォーラムの傘下に専門委員会を置くことにする。

### フォーラムメンバー

#### ◎福岡側

- 石原進(ＪＲ九州社長)
- 今村昭夫(九州経済調査協会理事長)
- 梶山千里(九州大学総長)
- 久保田勇夫(西日本シティ銀行頭取)
- 竹嶋康弘(日本医師会副会長)
- 田尻英幹(福岡商工会議所会頭)
- 多田昭重(西日本新聞社社長)
- 寺崎一雄(TNCテレビ西日本社長)
- 橋田紘一(九州電力常務)
- 山本正秀(やまとコミュニケーションズ社長)
- 吉元利夫(住友商事九州社長)

#### ◎韓国側

- 李根鎬(釜山銀行頭取)
- 李鍾均(釜山韓日親善協会会長)
- 姜南周(朝鮮通信史文化事業会委員長)
- 金任權(大型旋網水産業協同組合組合長)
- 金仁世(釜山大学総長)
- 金政勲(韓進重工業副会長)
- 金鍾烈(釜山日報社長)
- 申正澤(釜山商工会議所会頭)
- 張聖萬(学校法人東西学園理事長)
- 秋俊錫(釜山港湾公社社長)
- 朴鏞吉(KNN社長)



## 福岡県民シンポジウム

# 日韓「華」の饗宴

日 時:2006年11月18日(土)  
会 場:九州国立博物館ミュージアムホール

主 催:九州大学韓国研究センター  
福岡県国際交流センター  
後 援:九州国立博物館・(財)日韓文化交流基金  
国際交流基金・福岡県教育委員会  
西日本華道連盟・(社)韓国生花協会  
福岡県花き園芸連合会・福岡県花商団体連合会

基調講演:一ノ瀬梅岳(西日本華道連盟理事長 新池坊家元)  
「花の舞:和の心を活ける」

趙在仙(韓国生花協会名誉理事長)  
「花の舞:韓の心を活ける」

韓国の生花は、花材の色彩、質感、動線などを重視する。これに対し、日本の生花では花を通じて「心」を表現することに重きを置く。このように日韓の生花の違いについて、講演者はデモンストレーションを行うとともに、総合的な討論を行い、わかりやすい解説をして頂いた。

当日は多くの観衆が集まり、お二人の講師による講演に熱心に耳を傾けた。同時に、生花の展示スペースも設けられ、日韓それぞれの作品がその美を競うが如く展示され、訪れた観客は作品の美しさに息をのんだ。



## ～参加者の声～

今回はたまたま新聞でキャッチしてラッキーでした。アクセスでのデモンストレーションも拝見し、韓国からいらした両女史の素晴らしい打たれました。決して喜びのなかに学ばれたのではない日本語を思い出されてのトークのおかげで、こちらはすんなりと話を承ることができましたことを感謝しなければならないと存じております。

花を通して、これからも楽しく日韓交流ができたらよいと思いました。



韓国国際交流財団2006年度大学院対象研究奨学金

# 韓国国際交流財団大学生対象 奨学金報告会

日 時:2007年1月26日  
会 場:韓国研究センターニ階会議室

2006年度、本学で韓国学を研究する大学院生7名（新城道彦・川西裕也・木村貴・松岡雄太・原智弘・石橋道秀・渡辺芳久）は、韓国国際交流財団から2006年度大学院対象研究奨学金を受けた。日本全体で受給大学はわずかに5大学、受給者も20名にすぎない。採択者7名という数字は、五大学の中でもトップの数字である。これだけを見ても、韓国国際交流財団の本学の韓国学教育に対する期待の大きさが伺える。同時に本学が担う責任も重大である。そこで、本学における韓国研究の更なる飛躍を期し、受給生の研究成果の検証を行い、受給生同士のネットワークを形成するために、研究中間発表会を執り行った。

そして、受給生の研究成果は、一冊の報告書に纏められ、韓国国際交流財団へと提出された。

- 松岡雄太(人文科学府博士後期課程)  
「司訳院訳学書の朝鮮語一蒙学書と清学書を中心に一」
- 川西裕也(人文科学府博士後期課程)  
「朝鮮時代における告身文書の基礎的研究」
- 渡辺芳久(比較社会文化研究学府修士課程)  
「韓国青銅器時代における木材資源利用の研究」
- 石橋道秀(比較社会文化研究学府博士課程)  
「仮名書き朝鮮語資料によって期待される中世韓国語母音『アレア』に関する新見解」
- 木村貴(法学研究院博士課程)  
「民主化後の『国民統合』政策としての『過去克服』作業」

## ～参加者の声～

これまで、同じ大学に属するとはいえ、他分野の研究を耳にする機会はほとんどなかった。そのため、今回の報告会では、様々な分野の研究を聴講することができ、大いに刺激を受け、自らの研究を見直すきっかけとなった。また報告会終了後には、現在の韓国の動向など、情報交換する機会を得ることができ、非常に有益であった。



## 日韓海峡圏学生サミット2006

# 『日韓の学生が見る大衆文化 －大衆音楽の共同調査からみた提言』

日 時:2006年9月7日  
場 所:東西大学校日本研究センター

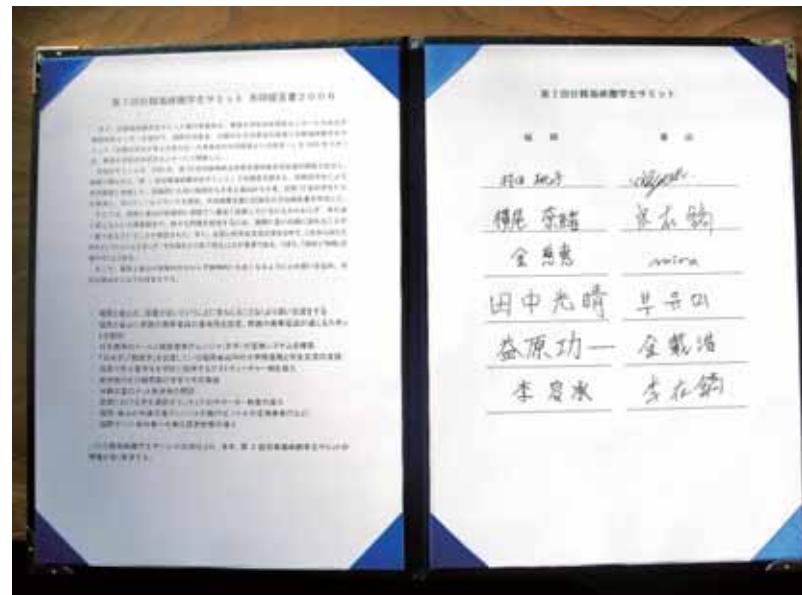
主 催:日韓海峡圏学生サミット実行委員会  
後 援:東西大学校日本研究センター  
九州大学韓国研究センター

日韓両国の学生12名が、3つのグループに分かれ、釜山にて韓國の大衆文化、特に音楽について、会社を訪問しインタビューを行うなど、フィールド調査を行った。フィールド調査の結果を各グループが相互に発表・意見交換を行った後、「第2回日韓海峡圏学生サミット 共同提言書2006」を策定した。同共同提言書は、福岡・釜山フォーラムを通じ福岡・釜山両市の市長に渡された。

また、このサミットに先立ち、9月2日には大衆文化への理解を深める目的で、日韓学生シンポジウム『日韓大衆文化の潮流を探る』を国際交流基金ソウル文化センター会議室にて開催した。基調講演の李敬淑(高麗大学校)「日韓大衆文化の潮流を探る」、金慈恵(九州大学)「日本の少女マンガの需要－矢沢あい『NANA』の韓国読者を中心に－」に続き、グループディスカッションを行った。この一連の活動を通じて、両国学生の交流は促進され、相互認識は大変深いものになった。(プログラムマネージャー 田中光晴)

## ～参加者の声～

日本では「韓流」ブームが到来し、韓国は昔より近い国になつたといえる。政治的な課題は山積しているが、民衆の間で交流が進むことは望ましいことだと思う。「心をとざして相対すれば戦いとなり、胸襟を開き相語れば平和となる」とは、まさにこのことを言うと実感した。



第2回 日韓海峡圏学生サミット共同提言書



インターネットを利用したテレビ会議の様子

## 韓国理解講座

# 韓国学への招待

日 時:2006年度前期

会 場:九州大学六本松地区

九州大学所属の韓国学研究者を中心に、各分野の碩学が韓国学の魅力を語る最高水準の韓国学入門講義。人文科学や社会科学は勿論、農学や芸術学にまでその分野は及ぶ。各分野の最新の研究成果を紹介しつつ、300名を超える受講者を韓国学の世界へと誘った。本年度は、当韓国研究センター客員教授である鄭英一氏、さらには日韓外交の前線に立つ、柳宗夏氏(前大韓民国外務部長官)と宮島昭夫氏(在大韓民国日本国大使館公使)の二名を加えた豪華講師陣となった。

### 《日程》

第1回 松原孝俊(韓国研究センター教授)  
「受講案内」

第2回 松原孝俊(韓国研究センター教授)  
「韓流文化の理解」

第3回 浅羽祐樹(韓国研究センター研究員)  
「現代韓国政治」

第4回 鄭英一(韓国研究センター客員教授)  
「現代韓国経済」

第5回 坂元一光(人間環境学研究院助教授)  
「多産多福と多男富貴の今日:産育から見た韓国社会」

第6回 森平雅彦(人文科学研究院助教授)  
「戦前日本の朝鮮史研究と朝鮮史像」

第7回 柳原正治(法学研究院教授)  
「韓中日における国際法受容」

第8回 吉岡英美(経済学研究院助教授)  
「韓国の経済発展をどのように見るか?」

第9回 濱田耕策(人文科学研究院教授)  
「古代史を考える視角」

第10回 柳宗夏(前大韓民国外務部長官)  
「韓国の対北政策」

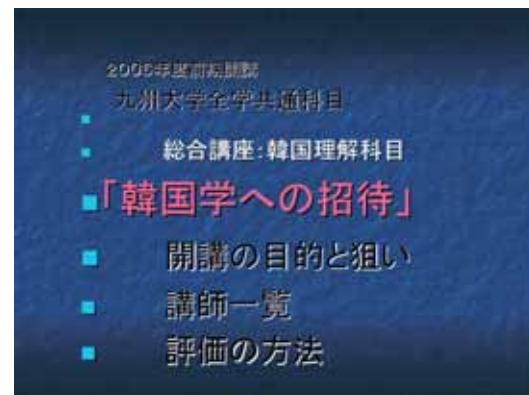
第11回 宮島昭夫(在大韓民国日本国大使館公使)  
「未来志向の日韓外交」

第12回 曹美庚(言語文化研究院助教授)  
「日本人と韓国人の異文化コミュニケーション」

第13回 鈴木宣弘(農学研究院教授)  
「日韓FTA:東アジア共同体に向けて」

第14回 石川幸二(芸術工学院教授)  
「元従軍慰安婦ハルモニ達の絵」

第15回 松原孝俊(韓国研究センター教授)  
「試験」



第2回講義「韓流文化の理解」  
松原孝俊(韓国研究センター 教授)



第4回講義「現代韓国経済」  
鄭英一(韓国研究センター 客員教授)





全京秀 (チョン・ギヨンス)  
ソウル大学校 教授



朴露子 (パク・ノジャ)  
オスロ大学 教授

### 1) 研究

近年、私は日本人類学史に対して基本的に関心をもっており、その一部である京城帝国大学教授たちの人類学的作業に対して資料群を整理し、当時の研究成果に対する評価を行っている最中です。現在「京城人類学派」という題目で論考を整理しており、この作業は相当数の研究者を含まねばならないため、近日中に完了するであろうとは考えていません。福岡に滞在した3ヶ月の間、私は赤松智城の資料（山口県徳山市にある徳應寺に保管されている資料を整理）、熊本を訪問して岩崎繼生（東京帝国大学社会学卒、満洲国官吏）の資料を探問し、戦後博多にて医療関係の活動を行った泉靖一の足跡を、一部ではあるが整理しました。このような資料群を、京城人類学派という全体脈絡の中で整理をしています。

### 2) 韓国研究センター

極めて意欲的に事業を進行している研究センターだと思います。その大きな意欲を全て実践しようとする意志が強すぎるために発生している問題もあるようです。韓国研究センターは基本的に九州大学という枠の中にアイデンティティを求めることが重要であると思います。九州大学の過去と現在に対するレビューの中から韓国研究センターの未来への活路を模索することはどうでしょうか。例えば、九州と福岡、そして九州大学という位置と過去の位相を考慮すると、「大陸」に向けた問題意識があると思います。そのような枠を再吟味し調整しながら、歴史的脈絡とも連携が可能な韓国研究センターの研究方向が設定されるであろうと思います。ありがとうございます。

1)私の研究は現在、いくつかの分野から成り立っています。その内、中心的な分野は韓国、さらには東アジア地域全体の近代初期における社会進化論的議論に対する研究です。凡そ東アジアで1880年代以後定着した社会進化論は、個人間の「生存闘争」というよりは、国家間の「生存闘争」に焦点を合わせており、諸国家の世界を「弱肉強食」と理解しつつ「劣敗者」ではなく「優勝者」になるため「私心のない国家への貢献」と「国民的团结、総和」を呼びました。こういった側面では社会進化論が国家主義イデオロギーの裏付となったり、また国家主義に包摂された「国史」、「国文」、「修身」などにおける議論の基軸的な役目を果したりもしました。現在、私は韓国(東アジア)社会進化論に対する英文著書を準備している最中です。韓国語ではすでに2005年、『優勝劣敗の神話』という社会進化論関連の著書をハンギョレ出版部から出版しました。

私の研究のもう一つの分野は、近現代韓国の仏教史です。私が2006年秋に福岡に滞在しながら、近代韓国の最もすぐれた仏教的「偶像破壊者」である萬海韓龍雲(1879-1944)の主要な著述の英訳及び註解作業を終え、その原稿をイギリスの出版社 Global Orientalに送りました。来年夏頃に韓龍雲の本が英文で出版されることを期待しています。これ以外に私はデンマークの著名な東アジア仏教学者 Henrik Sorensen博士とともに韓国近現代仏教の通史を執筆しています。事実、後輩のための通史類の執筆は、私が多くの時間を割いていることです。福岡に滞在中には、3年間執筆してきた『韓国通史』の第2巻(1876-1945)を書き終えたりもしました。

そして社会進化論や仏教と共に私が韓国の軍事主義及び軍事主義に対する抵抗、特に兵役拒否運動の研究もしており、その運動に直接に関係したりしています。

2)ヨーロッパの韓国学自体がアメリカや日本に比べて脆弱ではあります  
が、その中でもイギリスやフランス、ドイツに比べれば北欧は、いまだ創始期の状態といつても過言ではないです。元来スウェーデンで、1950年代からストックホルム大学の Staffan Rosen などの元老学者による韓国語中世文法の開拓的研究が行われ、後に Rosen 先生の弟子の中からは、1811~12年の洪景來の乱や韓国の造船業、そしてスウェーデンでの韓国系養子の適応問題など、多様な主題を研究する研究者がいました。ところが、いまだにスウェーデンでさえも韓国学人口が少なく、学問的伝統を引き継ぐような明確な「学派」が形成されていません。フィンランドでは優れた韓国語学者高松茂(1947-1993)先生がいらっしゃった時節には、韓国語研究の「学派」が形成されたように思えるが、高先生が不意の事故で逝去した後は、その求心点を失ってしまいました。今、高先生がいらっしゃったヘルシンキ大学で一人の若い学者が、大きな期待を集めれる韓国の零細事業人の研究を人類学部門でしています。デンマークでは私の同業者である仏教学者 Sorensen 以外にもコペンハーゲン商務大学で Carl Saxer 先生が韓国の民主化過程を研究するなど、若干の韓国研究がなされています。ノルウェーの場合、わたし以外に韓国学研究をする人はいないと理解しています。

## 韓国研究センターの研究活動一覧

年	日時	活動内容	主催・共催・助成
2006	前期(4月～9月)	韓国理解講座 「韓国学への招待」	主催:九州大学韓国研究センター(RCKS) 助成:韓国国際交流財団
	5月19日	第25回定例研究会 鄭英一先生(ソウル大名誉教授)	主催:RCKS
	6月9日	第26回定例研究会 李栄薰(ソウル大経済学部教授)	主催:RCKS
	6月17日	日韓国際シンポジウム 「在日朝鮮人文学の世界」	主催:全北大学校人文学研究所・RCKS 主管:在日同胞文学研究団 後援:韓国学術振興財団・朝日新聞西部本社 助成:松原科研
	8月1日～6日	第2回韓国学国際ワークショップ 「韓国学の新しい潮流」	主催:世界韓国研究コンソーシアム 主管:RCKS 助成:韓国国際交流財団・九州大学P&P
	8月5日	第27回定例研究会 李根(ソウル大国際大学院教授)	主催:RCKS
	9月2日	日韓学生シンポジウム 「日韓大衆文化の潮流を探る」	主催:RCKS 助成:国際交流基金・日韓文化交流基金
	9月7日	第2回日韓海峡圏学生サミット	共催:東西大学校日本研究センター・RCKS 助成:国際交流基金・日韓文化交流基金
	9月8日・9日	福岡-釜山フォーラム釜山シンポジウム 「日韓海峡圏:『国境を超える地域』協力モデルの模索」	主催:福岡-釜山フォーラム 事務局:東西大学校日本研究センター・RCKS
	9月19日	第28回定例研究会 金一榮(成均館大政治外交学科教授)	主催:RCKS
	10月23日・30日	福岡県民セミナー 「日韓華道饗宴」「日韓『こと』の競演」	共催:福岡県国際交流センター・RCKS 助成:韓国国際交流財団
	11月10日	第29回定例研究会 朴露子(オスロ大教授)	主催:RCKS
	11月18日	福岡県民シンポジウム 「日韓華の饗宴」	共催:福岡県国際交流センター・RCKS 後援:九州国立博物館・日韓文化交流基金・国際交流基金・福岡県教育委員会・西日本華道連盟・韓国生花協会・福岡県花き園芸連合会・福岡県花商団体連合会 助成:韓国国際交流財団
	11月29日	第30回定例研究会 李元範(東西大教授)	主催:RCKS
	12月16日	日韓国際ワークショップ 「解放後と解放前:連続と非連続」	共催:成均館大学校東アジア学術院・RCKS 助成:松原科研
2007	1月19日	第31回定例研究会 全京秀(ソウル大人類学科教授)	主催:RCKS
	2月12日	日米韓3大学次世代研究者国際ワークショップ 「『植民地近代』研究の展望: 在朝日本人のオーバルヒストリー」	主催:RCKS 共催:高麗大学校民族文化研究院・UCLA韓国研究センター 助成:韓国学中央研究院・三菱財団・松原科研
	3月14日	第32回定例研究会 浅羽祐樹(九州大学韓国研究センター)	主催:RCKS

# Information

## ご投稿ください!

ニュースレターでは、できるかぎり幅広い広報を行うため、さまざまなコーナーを設け、皆様のご投稿をお待ちしています。

### 研究紹介

韓国・日韓関係にまつわる領域研究のもとでえられた具体的な研究成果を紹介します。また、韓国研究センターが支援する各種事業の成果の報告、諸分野の研究方法や研究の背景、内外で発表された優れた研究を紹介するコーナーです。

### インタビュー

座談会やインタビューで、研究者の素顔をご紹介したいと思います。

### 研究ノート

“科学者のひとりごと” “研究に関して日頃思っていること” “韓国との出会い”等々お寄せください。

### その他

関連する学会・研究会・シンポジウムの案内、近著紹介、等につきましても掲載いたしますので、隨時お知らせください。

**センター利用案内**  
開館時間／10:00～17:00  
九州大学韓国研究センターでは下記のホームページURLで事業紹介を行っています。  
<http://rcks.isc.kyushu-u.ac.jp/>



#### ■最寄りの交通機関

- JR博多駅→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車
- 福岡空港→地下鉄中州川端乗換(貝塚行)→箱崎九大前又は貝塚下車



#### バスのりば

- 天神14番のりば No.1、59、61、161の「九大前」行き、「月見町」行き→九大前下車
- 天神郵便局前のりば No.21～27→九大北門下車